

爾雅曰、盥謂之缶、注云今盆也、呂氏春秋曰、堯使質絡缶而擊之、則缶已爲用於堯世矣、周官牛人祭祀共其盆、簠、禮器、孔子曰、與者老婦之祭也、盛於盆、尊於瓶、此又二物之名、出於周代也、

〔東雅器用〕盆ヒラカ 倭名鈔に、唐韻を引て、盆は瓦器也、字亦作瓮、辨色立成にヒラカといひ、俗にはホトギといふと注せり、○中ヒラは平也、其形をいふ也、カは焼也、瓦器なるをいふ也、猶漢に瓦盆といふが如し、ホトギの義不詳、

〔倭訓栞前編二十五〕ひらか 日本紀に平瓮をよめり、かは筒の義成べし、式に或は水瓮を訓せり、又手湯瓮もあり、新撰字鏡に甗をよめど考得ず、甗もよめり、倭名抄に盆をよめり、瓮に同じ、唐韻に瓦器也と見えたり、今俗漆器に音をもて盆とよぶものは、其形の似たる成べし、もと槃の屬也、

〔古事記上〕於出雲國之多藝志之小濱造天之御舍多藝志三而、水戸神之孫櫛八玉神爲膳夫獻天御饗之時、禱白而櫛八玉神化鶉入海底、咋出底之波、邇此二字作天八十毘良迦此三字、

〔古事記傳十四〕比良迦ハヒラカは○註書紀神武卷に、平瓮此云毘羅介と見え、○中さて此器は今の皿又土器の如くなる物と聞えたり、但儀式に比良加徑一尺三寸深一尺四寸と見え、大嘗祭式に比良加一百口各受一斗など、もあれば、大なるも有なるべし、名義比良ヒラカは、書紀に平瓮と書る如く深からず平なる形をいふ、○註迦カは此類の器の總名と聞えて、由加ユカ○註多志良加タシラカ見ゆ、

どあり、又甗サカハラケ土器などの氣も通音なれば、本トツ名なるべし、○中太神宮儀式帳に、天比良加十二口など見ゆ、今伊勢神宮に用る比良迦ヒラカ俗に盆ボシ瓦と云て、形は丸き盆の如く、徑八寸許、深一寸許、もとにて、尋常の土器の如き焼なる物にて、毎節宇爾郷より貢すとなり、今も心御柱のことに安く、

〔日本書紀神武三〕戊午歲九月戊辰、天皇陟彼菟田高倉山之巔、瞻望域中、○中賊虜所據皆是要害之地、

故道路絕塞、無處可通、天皇惡之、是夜自祈而寢、夢有天神訓之曰、宜取天香山社中土香山此云、以造天平瓮八十枚、平瓮此云、并造嚴瓮嚴瓮此云、而敬祭天神地祇、亦爲嚴呪詛、嚴呪詛此云、怡怡如此則虜